福島潟の白鳥とヒシクイ
日本有数の渡来地
本田清さんに聞く

いま多数の白鳥とヒシクイの鳴き声が、冬枯れの福島潟をにぎわしています。

この白鳥とヒシクイについて、亀田町の本田清さんに聞いてみました。

本田さんは、日本白鳥の会の事務局長で、白鳥研究の第一人者です。

本田清さん

――まず、本田さんと福島潟との出会いは、どんなことからでしたか。

「子供のときから写真が好きで、三十三年から白鳥の写真を撮り続けたんです。そのうちに白鳥のことが、もっと知りたくなり、福島潟はどうなっているかと、出かけたのが出会いです」

――それで白鳥は。

「いました。たくさんいました。そのとき、白鳥の本場は、福島潟じゃないかと直感しました」

――福島潟が銃猟禁止区域になったのは、三十六年の秋のようですが。

「水面のある間は、ハンターも福島潟に入るんですが、真冬にはハンターが入らなくなり、白鳥が来るんです」

――福島潟と瓢湖は、関係があるんですか。

「これは、本来こういう潟があって瓢湖の白鳥が成立したんだと思います」

――白鳥と福島潟干拓の関係は。

「干拓前までは内沼沖の高橋付近に多くいたんですが、干拓後は新発田市の鳥穴地先へ移動しました。銃猟禁止区域になったのは干拓工事の人を危険から守るためのようでしたが、それでも白鳥が安心しているようになりました。しかしまだ県内の他の湖沼に比べると定着する形が不安定です。理由は、あろいろあると思うんですが、まず水面が少ないことだと思います」

――福島潟に白鳥は、昔からいたんでしょうか。

「はっきりしないんです。今のうちに古老から聞いておいたらと思います。昔は鮎も鮭も上ったという福島潟ですから、いろいろな水鳥類がいて、当然白鳥もいたと思うんですが、しかし狩猟地だったから定着しなかったと思います」

――以前、白鳥を見たという人は少ないんですが、ガンは昔から多く来ていたようですが。しかし戦後まったく見えなくなった時期がありますが

「ガンは、銃猟を禁止してからまた来るようになりました。白鳥もきることながら、福島潟は、今や日本有数の重要なガンの拠点なんです」

――ガンには、どんな種類がいるんですか。

「大きく分けるとマガンとヒシクイです」

――福島潟のガンは、どっちですか。

「ヒシクイです。マガンで有名なのは、宮城県の伊豆沼です。ここは、天然記念物のガンが来るということで、沼が天然記念物に指定されています。福島潟も同じなんですが」

――ヒシクイは、福島潟に何羽くらいきていますか。

「いま千五百羽くらいです。環境庁の調査によると、日本に来るヒシクイは四千羽から五千羽くらいです。マガンとの識別をもっと正確にするともっと少ないかも知れませんが、そのうちの千五百羽が来るんですから大変なものです。白鳥よりも、もっと重要性があるといえます」

――ヒシクイは、何をたべているんですか。

「福島潟では、マコモの根や茎を食べています。マコモの量は、福島潟が県内で最大なんです。渡来の初期には鳥屋野潟へ七百羽から八百来るんです。そこでマコモやコウホネ、ヒシなどを食べつくすと福島潟へ来るんです。白鳥に追い出されるということもあるんですが」

――白鳥にとって、福島潟はどういう場所なんですか。

「福島潟にかぎらず、鳥屋野潟や佐潟など新潟周辺の残存湖は、日本の南北を結ぶ重要な拠点なんです。白鳥にとって、この辺は一つなのです。羽があるから自由かつ達なんです。自由に行ったり来たりしているんです。また、鳥屋野潟にいた白鳥が、ある日とつぜん島根県の中海に姿を見せ、また次に福島潟に現われたりします」

――どうしてわかるんですか

「首に標識をつけているんです。日本では緑、ソ連では赤、アメリカでは藍の標識を付け、それに番号を打ってあります。標識を付けた白鳥を見たら連絡いただけるとありがたいんですが」

――白鳥は、もともと集団を組む習性があるのですか。

「白鳥は、植物性のえさを食べます。植物性のえさを食べる鳥は、集団を組みます。しかし、昔はこんな大きな集団は組まなかったと思います沼などは、いたる所にあったんですから、もっと分散していたと思います。現在は沼などが少なくなり、福島潟などに集約せざるを得なくなったんです。だからこそ福島潟は大切なんです。特にこのことはヒシクイにとっても言えることです」

――福島潟を掘って、もっと水面を多くしたら、白鳥など水鳥が多く来るのでは。

「水面を単にふやすだけで良いかというと、そうではないと思います。掘るなら水深を五〇センチか六〇センチにして不整形に掘り込むとか来る条件を残さないと虻蜂とらずになるおそれがあります」

――福島潟は、大切なところなんですね。

「そうです。環境庁の一級野鳥観測ステーションもあります。そこでの標識調査は、日本一です。貴重な所です」

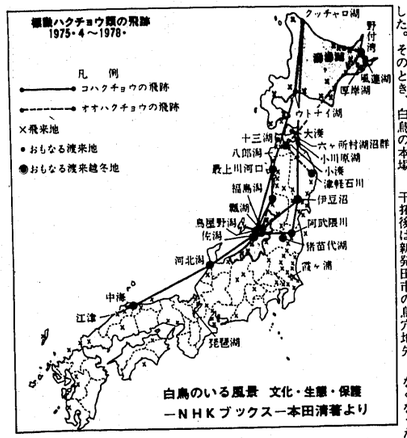
◎この文は、白鳥やヒシクイなどについて、長時間にわたってお聞きしたことについて福島潟に関係する部分を企画広報課で編集したものです。

◎首に標識を付けた白鳥を見つけた人は、標識の色・番号見つけた場所・日時を左記へご連絡願います。電話でもはがきでもけっこうです。

新潟市川端町二ノ九
林業ビル内 県公民館連合会
本田 清 電話（〇二五二）二四―六〇七三

本田さんの略歴

○一九五八年 白鳥を撮りはじめる ○一九六七年 アサヒカメラ賞受賞 ○一九七一年 第一回国際白鳥会議（英国）出席 ○一九七三年 日本白鳥の会設立発起人となる ○一九七九年 NHKブックス「白鳥のいる風景 文化・生態・保護」を著わす ○現在 日本白鳥の会事務局長 国際水禽調査局日本委員会理事

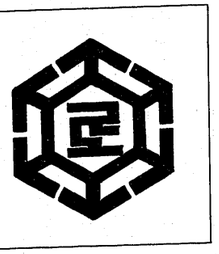


白鳥のいる風景　文化・生態・保護
―NHKブックス―本田清著より

校章めぐり(11)
上土地亀小学校

上土地亀小学校（小宮富郎校長、児童数百二十七人、職員十三人）

明治六年亀浦村大字浦木に開校。第二十二大区小七区公立太子堂小学校と呼ばれた。現在の校名は、明治二十年に改称され、同二十五年大字上土地亀に、校舎を改築移転した。昭和四十八年、創立百周年を迎えた古い歴史と伝統をもつ学校である。



校章の由来

学校沿革誌によれば、校章は、昭和七年に制定された。当時の故千秋譲止校長が、職員のアイディアを採用したものである。

雪の結晶を形どり、子どもたちが、純白な雪のように、清純で素直な子どもとして、育ってほしいという願いがこめられている。

中央には、上土地亀の「上」が、デザイン化して組み入れられており、柔かなあたたかみを感じさせる。

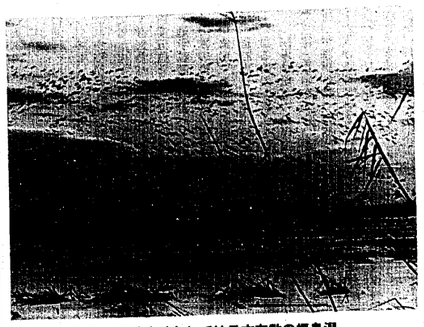
校章は、校旗はもち論、ステージ幕、演壇、名札等に、半世紀近く伝わっている。この校章を大切にうけつぎ、健康で、明るく、豊かな心を持つた子どもの育成を願うものである。なお最近、学校で飼っている亀が卵を産み話題になっている。

（小宮校長記）

ヒシクイ

マガンに似るが大きく、翼長四四～五二㌢㍍、尾長一二～一七㌢㍍、体重二・五～四五㌔㌘。体色もマガンに似て全身暗かっ色で、背とわきの各羽の先端に淡色の縁があるが、くちばしに接する部分の白帯はきわめて狭く、くちばしは黒く、中央に独特のだいだい色帯がある。脚は黄だいだい色。ヨーロッパ北部およびシベリアで繁殖し、冬は地中海沿岸地方、中国、朝鮮、日本などに渡る。日本では十月上旬ころから渡来し、翌春四月ころに渡去する。湾、湖沼、田、湿田などに群をなして住み、昼は水上や見通しのよい広い原野でねむり、朝夕採食に出かける。

（平凡社、世界大百科事典から抜粋）


白鳥とヒシクイの渡来地としては日本有数の福島潟。今日も多くの鳥が群がっていました。（1月9日午後4時撮影）